

日本社会心理学会会報

228号



発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>
編集・制作 広報委員会 (担当常任理事：三浦麻子)

2021年10月6日

日本社会心理学会第62回大会開催報告

日本社会心理学会第62回大会が2021年8月26日(木)・27日(金)に開催されました。今年は再び対面での思いは叶いませんでしたが、盛会のうちに無事終了いたしました。ご尽力くださった帝京大学文学部心理学科の先生方、特に敷島千鶴準備委員長と大江朋子事務局長に、心から感謝申し上げます。ここでは概要報告とともに、準備委員会外で招待講演の企画運営にあたってくださった会員の方々のコメント、参加した会員からの参加記を掲載します。また、記録としてWeb発表での質疑応答データの記述統計を掲載します。なお、すべての研究発表は日本社会心理学会大会発表論文集データベースでご参照いただけます。

概要報告

期日：2021年8月26日(木)・27日(金) ※当日発表資料公開・質疑応答期間：8月25日(水)～9月1日(水)

会場：帝京大学八王子キャンパス (Web開催)

大会準備委員長：敷島 千鶴

1. 参加者数 488名 (予約参加・当日参加の区別なし)
2. 発表件数 大会準備委員会招待講演4件 大会準備委員会シンポジウム1件 自主企画ワークショップ6件 発表212件
3. 発表取り消し 0件

招待講演企画報告

第62回大会の大きな特徴に、海外研究者による招待講演が4件(リアルタイム1件、オンデマンド3件)開催されたことがあります。感染禍で物理的な移動が難しくなったことは、それが伴うのが当然とされていたコンテンツにとってはむしろ活性化の方向に働いたと言えるでしょう。とはいえ、当然そこにはそれなりの苦勞も伴っていたはず、というわけで、招聘の実務を担った3名の会員諸氏にその報告を(裏話成分多めに、と言い添えて)お願いしました。

オンライン招待講演のポテンシャル

新谷 優

豪華な招待講演が企画できるというのはオンライン学会の最大の強みといえる。アメリカでバリバリ活躍している研究者は、月に数回は招待講演の依頼を受けて各地を飛びまわっているという。アメリカのエリート大学にいれば、著名な研究者の最新の研究について週替わりで手軽に聞くことができる。毎日が学会のようである。しかし、このように活躍している研究者は、学会ではあまり発表をしない。学会で発表するのは大学院生かテニユア前の若手研究者がほとんどである。残念なことに、日本在住の私たちにとって、世界の第一線で活躍する研究者の最新の話を聞く機会は乏しい。そんな中、大会準備委員会より、招待講演にお招きする候補者を考えて欲しいとの依頼があった。移動時間と距離の制約がゼロ、しかも事前に録画した動画での講演も可、という好条件が揃ったので、ここぞとばかりに通常であれば絶対に来ていただけないと思われる豪華な面々をリストアップし、スタンフォード大学のJamil Zaki先生にアプローチすることとなった。案の定、初めは学会の期間は都合がつかないとのことだった。しかし、動画でもいいんです!と粘ったところ、ご快諾いただいた。ライブで質疑応答をしたり、対面でお話ししたかった気持ちはもちろんある。しかし、国外の研究者に来日いただくことが難しいのであれば、コロナ感染が終息しても、オンライン招待講演はぜひ続けていただきたいと思う。どこでもドアが開発される日まで。ぜひ。(にいや ゆう・法政大学)

Beth Morling 先生招待講演裏話

菅 さやか

「お願いばかりですみません」という件名のメールを平石先生からいただいたのは、4月下旬のことだった。Morling先生の招待講演を少し手伝ってほしいという趣旨だったため、黒子に徹するつもりで気軽に引き受けた。ところが6月に入り、平石先

生が Tybur 先生の講演の Moderator を兼任されることになり、玉突き人事的に私が Morling 先生の講演の司会などを務めることになった。普段2歳の息子としかほぼ話していない私は、英語でのメールのやり取りやアカデミックな会話に大変不安を覚え(英語力がないのは息子のせいではないが…)、早速、平石先生から教わった翻訳ツール DeepL を契約し、これを大いに活用して、メールの文面や司会原稿を考えた。

事前の打ち合わせで、Morling 先生は、視聴者への様々な配慮を提案して下さった。それらに対する敷島先生と平石先生の迅速な判断と、尹成秀先生はじめ、準備委員の先生方のご支援のおかげで、準備は順調に進んだ。対応の速さは講演の成否を決める重要な要因であったと思う。

当日は、Morling 先生の明るさや優しさと、平石先生との間で醸し出されるフレンドリーな雰囲気が画面から伝わり、和やかな学会の開幕になったのではないだろうか。裏では、Moderator 同士で焦りながらチャットを交わす場面もあり、その様子を隠して上手く進行できていたか、気がかりである。

個人的には、方法論の問題について考えると少し暗い気持ちになってしまうが、Morling 先生の講演を聞いていると、できることから始めてみようという前向きな気持ちになれた。講演内容や講演の進行について、視聴者の皆様の感想を聞かせていただければ幸甚である。

(すが さやか・慶応義塾大学)

Morling 先生, Tybur 先生招待講演裏話

平石 界

敷島大会委員長から招待講演者を推薦して欲しいとメールが来たのは「今頃カナダの大地に抱かれていたはずなのに」と微妙な気持ちでサバティカルイヤーを迎えた4月頭のことであった。気合を入れて人選したら2人(Morling 先生と Tybur 先生)も採用となっていささか慌てた。自分だけで対応するとボカをしそうだ。たしか同僚の菅さんが Beth さん(Morling 先生)とお知り合いと仰っていたなど、彼女の家の魔の二歳児の存在に目をつむってヘルプをお願いした。そこからは菅さんが書いて下さっている通りで、Beth さん、菅さん、そして大会委員会の皆さんのヘルプのお陰で、充実したとても良い講演になった。

Tybur 先生はオンデマンド講演となったので油断していたら、他のオンデマンド招待講演ではモデレータと講演者のやり取り動画を公開するらしいと敷島委員長からプレッシャーを掛けられ震え上がった。自分の「英語みたいな何か」を衆目に晒すことは大会の品位にも関わり必ず避けねばならない。昨年と同じく Q&A コーナーがあると聞いて、これ幸いと予めメールと DeepL と Grammarly で質疑を仕込むことにした。共同研究者に話を振ったら、三船恒裕さん(高知工科大学)と山縣芽生さん(大阪大学大学院)も質問を寄せて下さった。Tybur 先生が夏休み中にも関わらず丁寧な返事を下さり、なんとか体裁が整った。

調子によって、Tybur 先生への質問から「社会心理学は社会的提言・政治的提言ができますか?」というのを取り出して、新型コロナ・ポスターセッションで投げかけてみたり、更には Morling 先生にも質問して、回答をブログで公開するなんてこともしてみた。自分としては、10年前の東日本大震災と Bem の超能力論文をきっかけとした、心理学と社会の関わりという問題意識が結節した2021年の社会心理学会であった。良い機会を与えて下さった関係各位に改めて感謝申し上げます。

(ひらいし かい・慶応義塾大学)

参加記

第62回日本社会心理学会大会参加記

ターン 有加里 ジェシカ

大会前日の院生リーグから大会終了日まで、八月最後の一週間は目まぐるしく過ぎ去りました。気付くと季節は秋になり、ようやく心が落ち着いた今、あの一週間を振り返ります。

<院生リーグ>

院生リーグとは、毎年大会の前日に院生会員が中心となって開催している集まりです。昨年は中止になったので、今年は二年ぶり、初のオンライン開催でした。今年の幹事・中田星矢先生(北海道大学)がオンラインで集まるための手はずを整えてくれたおかげです。院生リーグでは、互いの発表にコメントしあったり、実験や分析のためのテクニックを教えあったり、あるいは単におしゃべりしたりと、同じ立場どうしだからこそ気軽に意見交換や悩み相談ができる場が用意されています。この一年半、院生仲間とのたわいないやりとりが不足していたので、今年の院生リーグでは大いに癒しと刺激を享受しました。

<大会一発表者の立場から>

本大会では、私の博士論文の土台となる予定の実験結果を発表しました。視聴者の方々から丁寧なコメントをいただき、コメント一つ一つに対して感謝の気持ちでいっぱいです。コメントをいただく度に、同じ実験結果であっても様々な見方ができることを知り、私の視野の狭さを痛感すると同時に、新しい視点を得られたことへの大変な喜びを感じました。例えるならば、「群

盲象をなでる」に登場する或る盲人のごとく、私は象の鼻のみを触って象を分かった気になっていましたが、象の耳や足を示してくれた方や、象を俯瞰して見た姿を示してくれた方などのおかげで、象が思っていたよりも大きかったことに気付かされた気分でした（図1）。

本大会は昨年と同様にオンライン開催で、発表者と視聴者は掲示板を使ってやりとりができました。掲示板式であることの良さは、特にコメントをお返しするときに感じました。口頭とは異なり、掲示板では質問をいただいたらすぐに先行研究を見たり再分析をしたりできます。その過程で新しく気付いたことが多々ありました。また、掲示板ではメモを必死で取らずともコメントが記録されます。その記録をもとに、大会後には

各コメントの要点を付箋に書き出し、KJ法らしき手法を用いて研究の課題を整理することができました。

<大会一視聴者の立場から>

昨年の大会でたくさんコメントしていた先生方を見習い、今年の大では積極的にコメントすることを目標としました。しかし、口頭と比べて掲示板ではコメントするのに時間がかかり、思ったよりコメントできませんでした。また、コメントしようとして下書きしているうちに、わざわざコメントする価値はないように感じられて、投稿に至らなかったこともありました。今振り返ると、素朴なコメントほど考えさせられることもあるので、勇気を出してもっと投稿すべきでした。

上のような反省点はありますが、全セッションを覗いて様々な研究に触れることができ、とても楽しませていただきました。細かい点ですが、資料の公開期間が一週間と限られていること（先延ばしせずに済む）、UIデザインがシンプルであること（資料やコメントが見やすい）、コメントへの返事があればメールで通知されること（ディスカッションしやすい）といった諸々の工夫もありがたかったです。

その一方で、昨年の大会参加記に石黒格先生（立教大学）が書かれていた通り、各発表のコメント数を示す赤い数字の影響が気になりました。特に私に馴染みがないトピックを扱うセッションでは、コメント数が何を示しているわけではないと分かっているながら、ついコメント数の多い発表が目が行きます。赤い数字がなければもっと自分の関心に従って各発表を見ることができたかもしれません（赤い数字の恩恵を受けたであろう私が言うのも恐縮ですが……）。

最後になりましたが、大会運営にご尽力くださった先生方に心から感謝申し上げます。上記のような掲示板式の発表の場を用意してくださったことに加え、オンライン開催だからこそこできることとして海外の先生を招いてくださるなど、様々な点で充実した大会だと感じました。本大会は私にとって今夏一番の思い出となりました。（たーん ゆかり じゅしか・東京大学大学院）

JSSP2021 参加記

小林 智之

8月26日と27日に日本社会心理学会第62回大会がオンライン開催されました。私は、この2日間は社会心理学にどっぷり浸かるぞと意気込んでいて、Active mailの同期を消してパソコンに向かいました。昨年の大会は残念ながら参加できなかったので、社会心理学会のオンライン学会は初めてでした。リアルタイム配信は一本軸にされ、その他のオンデマンドやWeb発表（従来のポスター発表か口頭発表にあたる）はいつでも見れたので、見たいものを余すことなく楽しめる構造でした。

Web発表は、開催前日から質疑応答が可能で、テキストベースで議論されました。質問を投稿して、返事が来ると、メールでお知らせが来ました。私が質問した方々はすぐに返事をくれ、チャット感覚でディスカッションを楽しむことができました。他の方々のディスカッションを覗き見れるのも良かったです。ただ、自分の質問コメントがどうも査読コメントみたいになってしまうので、どうしたものかと終始オロオロしていました。

印象に残ったWeb発表の研究として、井奥智大先生の「集団間関係における理解知覚の役割に関する間接的追試」は、日本人と在日中国人の関係について、相手から自分たちが理解されていると思うかという理解知覚が集団間関係に及ぼす影響を検討していました。研究テーマに関心があってお邪魔したのですが、翻訳した尺度の妥当性を検討するために先行研究のオープンデータを使って測定不変性の検討を行っているのが興味深くて、結果的に、分析のことばかり質問してしまいました。

26日と27日の2日間は、ほとんどリアルタイム配信のワークショップを見ながら過ごしていました。どれも興味をそそる発表ばかりで充実していましたが、とくに印象に残った発表は山口裕幸先生方の「チームの『心理的安全性（psychological safety）』に関する社会心理学的研究の今と将来」でした。ここでは、心理的安全性の概念が取り上げられ、チーム内で自由に自分の意見を言え、批難や攻撃をされる心配がないという信念の共有された状態を作るうえでの、リーダーシップの取り方について紹介さ

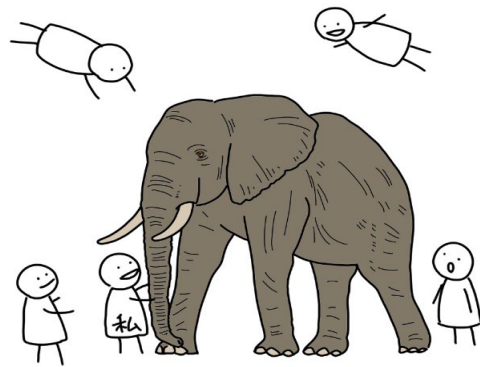


図1 視野が狭い私と新しい視点を示してくれる方々

れました。先行研究レビューや調査結果から、リーダーシップの変数が心理的安全性やチームのパフォーマンスに影響することがわかりました。また、ワークショップでは、1-on-1 ミーティングなど、心理的安全性を高めるための具体的なアプローチ方法も紹介されました。私事ですが、コロナ病棟やクラスターが発生した医療現場の職員の話を聞く機会がたびたびあります。コロナ禍において、医療従事者の責任感や同僚への気遣いは、ワークライフバランスやセルフケアの優先順位を下げさせています。そうした医療現場での職場環境づくりにも心理的安全性の概念がうまく適応できるように思いました。質問させていただくと、適応できる可能性はあるが、きちんと調べないといけないと教わりました。

また、全体を通して感じたことですが、社会への応用可能性について言及する発表が増えているような印象を受けました。社会心理学の知見が社会に大きく貢献することは、学会員の一人として誇りに思います。その一方で、私自身の反省でもあるのですが、発表中に引用されている文献が社会心理学研究に過度に偏ることへの危機感も抱きました。たとえば応用可能性について述べる時、疫学や公衆衛生学などの他の学術研究やWHOなどの専門機関のガイドラインや報告書で、同様のトピックが既に議論されていることは多いです。それらが引用されず、社会心理学研究のみ（とくに実験室実験や大学生を対象とした調査の知見のみ）を資料とするのでは、現場での再現可能性の議論や既存のシステムとの関係の議論は難しくなるのではないかと感じました。

最後になりましたが、開催校の敷島先生をはじめとする帝京大学の方々に感謝申し上げます。普段、私は医学部の中で働いていて、社会心理学者アイデンティティが脅かされがちですが、この2日間ですっかり満たされました。また、このような執筆の機会をいただいた編集委員会の先生方にも感謝いたします。そして、私の学会参加へのわくわくを察してくれたのか、とくにメールや雑務を振らないでくれた上司や同僚に感謝します。楽しかった。

(こばやし ともゆき・福島県立医科大学)

質疑応答データの記述統計

三浦 麻子

昨年度大会に続いて、研究発表はすべてオンラインで、発表者は大会論文集原稿に加えてスライド形式の発表資料を提供し、参加者との質疑応答はWeb 掲示板（開発の裏話は会報225号「オンライン大会裏話」に詳しい）によって行われた。また、招待講演とワークショップはオンデマンド配信とZoomによるリアルタイム開催があったが、いずれも同様の掲示板での質疑応答を受け付けた。昨年度大会と比べるとインタフェースが格段に改良され、また「いいね」ボタンも実装されたことにより、よりスムーズなコミュニケーションが可能となっていた。

図1に投稿者1名あたりの投稿数とともに基本的な記述統計量を示す（データは国際文献社提供）。投稿総数は1587件（うちWeb発表1557件、招待講演（4件）13件、ワークショップ617件）で、昨年度大会では227件の発表に対して投稿総数が895件だったのと比較するとほぼ倍増である。うち質問数（参加者がスレッドを開始した回数）は475件であった。投稿者総数236名は、全参加者488名の48.4%であった。また、「いいね」ボタンが押された総回数は372件であった。

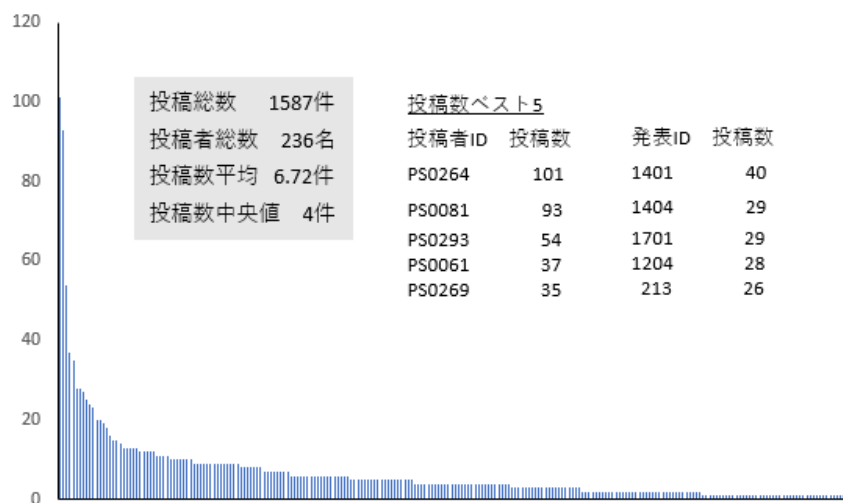


図2 投稿者1名あたりの投稿数と基本的な記述統計量

そもそも大会を開催するかどうか判断が分かれ、開催する場合でも「とにかく開催/参加すること」が目的だった昨年度と比べ、誰もが研究発表や会議のオンライン実施に慣れたこともあり、質疑応答は大いに盛り上がったといっていよう。他学会では、Zoom等によるリアルタイム口頭発表や、oViceやRemo等によるポスター発表など、様々な取り組みが行われていたが、それらに比べると掲示板は古典的なメディアである。しかしこのデータを見る限り、研究交流の場として十分に機能したように思われる。また、発表単位で見た投稿数ベスト5のうち3件は大学院生を第1著者とする発表であった。1年半以上にわたり、研究室の内外を問わない議論・交流の場がきわめて限られた環境下でもくじけずに研究を進めている若手研究者にとって、この掲示板での出会いが今後の研究の発展に寄与することを願ってやまない。

対面開催にあるリアルタイム性を思い切って廃した掲示板による質疑応答では、場を共有することによるダイナミズムは失われるかもしれないが、互いに大会参加者だという一定の安心感のもとで真摯な議論ができることに変わりはないし、ポスター発表なら数時間、口頭発表なら数分という限られた時間を気にする必要がなく、熟慮の上のやりとりはむしろ容易になる。こうし

た経験は、年次大会に限らず、今後の学会イベントを運営する際にも大いに参考になるだろう。

最後に、個人的なリクエストとして「責任著者以外の著者にも投稿通知がほしい」「期間終了後に発表者に質疑応答ログを提供してほしい」の2点を挙げておく。こうした掲示板システムを利用する機会がまたあるならば、是非実装をご検討ください。

(みうら あさこ・広報担当常任理事)

第23回(2021年度)日本社会心理学会賞選考結果のお知らせ

本年度の日本社会心理学会賞は、優秀論文賞1編、奨励論文賞1編、出版賞1編が選考され、第62回大会総会にて発表、総会後に授賞式が行われました。各賞をご紹介しますとともに受賞者のコメントを掲載いたします。受賞された先生方、おめでとうございます。

優秀論文賞

志水 裕美・清水 裕士・紀ノ定 保礼 社会経済的地位と怒り表出のメカニズム：心理的特権意識と正当性評価の媒介効果に注目して(第36巻第3号)

社会経済的地位(SES)が高い人は、心理的特権意識を持ちやすく、その結果として公の場で自らの怒りを表出しやすいのではないかという仮説を2つの研究により検討している。2つの研究で一貫してSESが高い人は心理的特権意識を持ちやすく、その心理的特権意識に媒介されて怒りを表出しやすいことが示されている。またSESが高い人は心理的特権意識が高いため公の場で怒りを表出しやすいという仮説の着眼点と、2つの研究を実施することでその妥当性を確認した研究姿勢が高く評価された。再現性の危機が問題視される中、複数の研究で知見の頑健さを確認するという研究態度は、これからの社会心理学に求められるものでもある。

奨励論文賞

古橋健悟・五十嵐祐 援助要請における援助者の切り替え方略：援助者数が援助要請者のストレスに及ぼす影響(第36巻第2号)

同じ相手に何度も援助要請を繰り返すことはストレスになることに着目し、援助要請者は援助を依頼する相手を切り替えることでストレスに対処している可能性を扱った研究である。複数回の援助要請を行う必要がある場面では、同じ相手に援助要請を繰り返すのではなく、援助を要請する相手を切り替えるほど、援助要請によるストレスが抑制されることが示された。援助要請というテーマから、切り替え方略という新規なテーマを発掘したこと、ネットワーク分析の指標を分析に取り入れたこと等、挑戦的な取り組みが評価された。今後、現実の要請場面での切り替え方略の検討へと発展することが期待される。

出版賞

尾崎由佳 自制心の足りないあなたへ：セルフコントロールの心理学(ちとせプレス・2020年9月刊行)

本書は自制心がはたらくプロセスを一般読者にもわかりやすく、いねいに紹介するとともに、研究者にとっても有益なレビューとなっている良書である。著者は自制心がはたらくプロセスを明らかにするために、まず本書で扱うセルフコントロールが何を意味しているのかという概念整理から始める。ここでは、学問的な意味と日常場面での実例を交えて、本書で扱う問題の所在が一般読者にもわかりやすく説明されている。次にセルフコントロールに関する心理学とその周辺領域における研究を紹介し、当該研究分野の裾野の広さを示してくれる。このようにセルフコントロールというテーマのもつ意味とそれに対する複数のアプローチを紹介し、読者に問題を十分に理解させた後、それがはたらくプロセスをいねいに説明していく。そもそも誘惑がなければセルフコントロールは必要ないので、誘惑が生じないようにしておけばよい。しかし、短期的で魅力的なオプションが存在すればついそちらに流されてしまいそうになる。そういったときに長期的で大きな目標を思い出すことで、短期的目標と長期的目標の間にある葛藤の検知が可能になる。検知された葛藤はうまく解消されるかもしれないが、解消されないこともあるだろう。解消されない場合も行動を抑制することで長期的目標を達成する行動をとることができるかもしれない。こうしたセルフコントロールのプロセスのそれぞれについて詳しく説明することで、どのような場合にセルフコントロールに失敗するのか、翻ってどうすればセルフコントロールができるようになるのかが説明される。

選考委員会が本書を出版賞にふさわしいとして推薦する理由は大きく次の3つである。第一点目はセルフコントロールという研究領域を一般読者にわかりやすく解き明かしている点。第二点目は、それと同時に、セルフコントロール研究についての良質なレビューになっており、研究者にとっても有益な学術書になっている点。第三点目は、特にセルフコントロールがはたらくプロセスについて著者自身の研究を交えた内容となっている点である。このため、本書は本格的な学術書という側面と一般読者に

に向けた啓蒙書という側面を併せもつ稀有な書籍となっている。

以上の観点から、本書を日本社会心理学会出版賞にふさわしい内容であると評価し、推薦するものである。

選考委員会

編集担当常任理事 1名 大坪 庸介 (東京大学)

常任理事以外の理事 6名

論文賞 金政 祐司 (追手門学院大学) 田中 知恵 (明治学院大学) 沼崎 誠 (東京都立大学) 吉澤 寛之 (岐阜大学)

出版賞 中島 健一郎 (広島大学) 藤島 喜嗣 (昭和女子大学)

理事以外の会員 4名

論文賞 小宮 あすか (広島大学) 樋口 収 (明治大学)

出版賞 唐沢 穰 (名古屋大学) 安野 智子 (中央大学)

受賞コメント

優秀論文賞受賞者を代表して

志水 裕美

(写真最左が志水さん、左から2番目が紀ノ定さん、最奥右が清水さん)

この度は名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。論文を評価していただいた選考委員の先生方には心よりお礼を申し上げます。また、論文執筆にあたり多くの方にご協力いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

本論文は公共の場の怒り表出について扱った研究です。このテーマに興味をもったきっかけは、私自身公共の場でマナーが悪い人をみかけた時に苛立ちを覚えることがあるのですが、周りの人たちは気にしていないかのように振舞っていることに不思議に感じたからです。自分が子供過ぎるのか、いやそれとも世の中の人間は案外怒っているのだと知ることが出来れば少しは安心するだろうと考え、このテーマについて研究することにしました。様々な先行研究を調べていると、多くの研究は家族や友人、先輩や後輩などの見知っている相手に対する怒り表出について取り上げており、公共の場で全く見ず知らずの他者に対する怒り表出の研究はほとんどないことに気づきました。この研究を最初に論文としてまとめたのは私自身の卒業論文でしたが、ここの抜けに学術的な意義を感じ、今回の論文投稿へと至った次第であります。

本論文は、社会経済的地位(socioeconomic status: SES)に注目をし、特に SES の高い人間について、怒り表出行動に至るメカニズムの解明を試みています。レストランや駅の窓口などの係員に、意味もなく自分の身分をひけらかして怒鳴っているシーンは誰もが容易に想像がつくのではないのでしょうか。このような人々は、「自分は特別な人間である」という心理的特権意識が高いために、その場での怒り表出を正当化していると考えられます。正当化は行動を促進する一つの要因になりますから、これが怒り表出行動を説明するメカニズムであることを一つの示唆として提示いたしました。

この論文の1つの特徴として、公共の場に限定していることが挙げられます。本論文では相手に過失がある場合とない場合の2パターン(さらに空港・カフェの2場面を作成しました)を提示しましたが、特に過失がない場面は、そのシナリオにこだわりを持って作成しました。1.誰もが容易に想像がつく。2.確実にフラストレーションがたまる。3.仮に怒り表出するとしても、その対象は店員や係員などのみ。4.けれども、よく考えたら相手もしくは相手の所属する企業に責める理由はない。作成は、空港場面は比較的容易だったのですが、カフェ場面はああでもない、こうでもないとなりながら試行錯誤したことは今ではよき思い出です。

本論文では2つの研究について報告をいたしました。実はその後、研究3として再度同メカニズムの検証を行っております。研究3では、公共の場では、SESの高い人間も怒りを表出することは示せたものの、一方でSESの低い人間は異なるメカニズムで怒りを表出していることを検証しました。具体的にはSESの低い人間は衝動性を媒介して怒りを表出しているのではないかという仮説をたて、心理的特権意識と衝動性変数を同モデルに組み込み、その結果は修士論文にまとめました。ともあれ、3回にわたって心理的特権意識を媒介したSESと怒り表出の関係について検証を行い、3回とも結果が再現されたことは事実です。そのため、私は今回この論文で提示した知見は、ある程度の普遍性は担保されているのではないかと考えています。し



かし、本論文の調査手法や場面が限定されていること、また、量的調査の限界の観点から、怒り表出のメカニズムを明らかにするためには、まだ課題は山積みです。この論文を通して言えたことは、ほんの小さなことに過ぎません。ですが、この論文が怒り表出のメカニズムを明らかにする一助となりますことを切に願っております。

最後になりましたが、この度の優秀論文賞は、関西学院大学 清水裕士先生、静岡理工科大学 紀ノ定保礼先生のご尽力なしでは決して得られたものではないと考えております。最後までご指導いただきましたこと深くお礼申し上げます。

(しみず ひろみ・株式会社インテージ)

2021年度奨励論文賞の御礼

古橋 健悟

この度は、奨励論文賞をいただき、ありがとうございます。大変光栄に思うと同時に、これからもより一層身を引き締めて研究を進めていきたいという気持ちになっております。共著者かつ指導教員の五十嵐祐先生はじめ、これまでご指導いただいた先生方、研究室などでコメントを頂いた先輩・後輩の皆様、同期の皆様、査読者の先生方、学会賞審査者の先生方、そのほかお世話になった方全てにこの場を借りて感謝を申し上げます。

今回賞を頂いた論文「援助要請における援助者の切り替え方略」は、タイトルのとおり援助要請（他者に助けやアドバイスを求める行動）に関する研究です。援助要請の中でも、援助者を選択する過程に着目し、どのように援助者を選択するのが援助要請者のストレスに繋がりにくいのかを検討しています。より具体的には、ストレスを低減する方略として、「援助者の切り替え」を提案しています。これは、「少数の他者に援助要請を繰り返すのではなく、多数の他者へと援助要請の相手を切り替える」という方略です。例えば、最初にAさんに援助要請をしても問題が解決されなかった場合に、もう一度Aさんに頼るのではなく、Bさん・Cさん…へと援助者を「切り替える」ということです。それにより、①一人の援助者にかかる負担が減り、援助要請者の心理的負荷感が減少する、②多様な援助を得ることができるというメリットがあるために、援助要請者のストレスが低減されるのではないか、という仮説をシナリオ実験によって検証しました。援助要請者のストレスを最小限に抑えつつ、援助要請を繰り返し行うことができることにつながる方略を示した点が、この方略のよさであると思っています。援助要請研究の中でも、援助者選択の方略という観点ではあまり検討がなされていないように思うので、今後さらに検討していく価値があるのではないかと考えています。また、個人的な話をすると、私自身は人に援助要請をするというのはあまり得意なことではありません。そのような苦手さがあるために、このような研究の方向性になっているというところもあるかもしれません。私をはじめ、援助要請が苦手な人にとっても価値がある研究だといえると思います。



この研究は、私の修士論文がベースとなっています。しかし、修士課程～博士課程にかけて、長期間格闘してきた研究でもあります。この場を借りて、そのプロセスを振り返りたいと思います。論文のもととなるデータを取得したのは、M1の12月くらいでした。そこから、論文を書いたり寝かせたりしつつ、何とか第一稿を書き上げたのがM2の5月くらいだったように思います。そこから、本当に本当にたくさんの添削や議論をしていただき、一から内容を見直したりしつつ、論文の改稿を繰り返しました（念のためですが、これはたくさん改稿して嫌だったという話ではなく、たくさんご指導をいただけてとても感謝していますという話です）。このプロセスでは、本当にたくさんの人に助けを求めました（切り替え方略）。そして投稿をしたのが、D1の3月です。データ取得から計算すると、2年3か月くらいかかってしまっています。しかし、そこからのプロセスは私が想像していたものよりもスムーズでスピーディーなものでした。おそらく、長きにわたる改稿の甲斐があったのだと思います。投稿前にしっかりと検討しておくこと・諦めないこと・めげないことが重要なのだと思いました（当たり前ですが）。かなり時間がかかってしまった研究ではありますが、論文として形になり、こうして賞までいただけたこと、大変うれしく思います。

最後に、冒頭でも記載したことの繰り返しとなってしまっていますが、これまでご指導・ご協力を頂いた方々に感謝申し上げます。学会の先生方に置かれましても、今後ともご指導ご鞭撻のほどいただけますと幸いです。この度は本当にありがとうございます。

(ふるはし けんご・名古屋大学大学院)

出版賞受賞の御礼のこぼ

尾崎 由佳

拙著『自制心の足りないあなたへ—セルフコントロールの心理学』（ちとせプレス）につきまして、このような栄誉ある賞を賜りましたこと、審査をご担当された先生方および学会ご関係者のみなさまへ心より御礼申し上げます。

「無いなら自分でつくればいいじゃない！」という精神で、これまで研究教育活動に取り組んでまいりました。こういうこと

をしたい、ああいうことをやってみたいというアイデアを思いついたものの、それを実行するためのツールが無いというのはよくあることです。そんなとき、あきらめきれずに（往生際が悪いのです）、どうにかこうにか工夫して自作を試み、不格好ながらもどうにか形にするということを繰り返してきました。

院生時代には、新しい実験のアイデアを思いついて、段ボールやガムテープをつかって実験器具を自作したこともありましたが——その実験の成果は、わたしが人生で初めて発表した論文になりました。当時の日本ではほとんど注目されていなかった経験サンプリング法(ESM)の調査をどうにか実施したくて、夜中に眠い目をこすりながらメール 400 通余りの送信予約をひとつひとつ手動で設定したこともありましたが——この苦労した経験は、5年後、LINE メッセージを自動送信する ESM 専用ソフトウェア exkuma (<https://exkuma.com/>) の開発に活かされました。

このたびの受賞作も、「無いなら自分でつくればいいじゃない！」という発想からスタートしています。私の専門とするセルフコントロールというトピックに関して、知的好奇心の高い一般の方や大学生に何か本を紹介しようと思っても、かなりハードな学術書か、ライトな読み物しか見当たらないという状況でした。ちょうどその中間あたり、すなわち心理学的な知見をきちんとカバーしながら、わかりやすく整理され、すいすい読めるような本があったらいいのに…。それなら自分で書けばいいじゃない！ということで、遅筆ゆえに四苦八苦したものの、数年越しでどうにか完成できたのが本書です。拙い著作ながらもどうにか世に送りだせたこと自体に満足しておりましたから、このような素晴らしい賞をいただくことになるとは思ってもよらず、望外の喜びとなりました。本書の執筆にあたり貴重な助言や励ましをくださった全ての方々に、改めて心より御礼申し上げます。今後この本を手にとりくださる方にとって、セルフコントロール研究への関心や理解が深まるきっかけとなりましたら幸甚です。

今回の受賞を励みに、これからも「無いなら自分でつくる」の精神で、次なるチャレンジに取り組んでいきたいと願っております。目下取り組んでいるのは、オンライン心理実験をカンタンに自作できる教育研究用ソフトウェア Psychexp の開発です。コロナ禍の状況で、多くの先生方がオンラインで心理実験演習を行わざるを得ず、その授業準備や運営に大変ご苦労なされたことと思います。また、プログラミングの知識を持たない学生にとっては、自由な発想を活かして実験手続きを工夫することが困難もしくは不可能な状況でした。もっとお手軽に、充実感のある学びを提供できないものか——はい、無いならつくればいいじゃない！ということで、Psychexp (<https://psychexp.com/>) は誕生しました。（ご覧のとおり格好良い仕上がりになっていますが、これは私の手によるものではなく開発者さんのセンスです。私はアイデア提供に関わっています）。いま順調に育ておりますので、今後の成長もぜひ楽しみに。

(おざき ゆか・東洋大学)

会員異動（2021年5月26日～2021年9月30日）

入会

《正会員》

・一般 足立 邦子（園田学園女子大学経営学部ビジネス学科准教授）、飯島 雄大（帝京大学文学部心理学科講師）、榎原 良太（鹿児島大学法文学部准教授）、関本 文博（医療法人社団ベスリ会ベスリクリニック臨床心理部マネージャー）、村木 益実（尚美学園大学音楽応用学科音楽ビジネスコース教授）

・大学院生 石井 悠紀子（東京大学大学院教育学研究科大学院生）、内形 洋和（兵庫教育大学大学院学校教育研究科大学院生）、加藤 伸弥（武蔵野大学大学院 人間社会研究科大学院生）、KIM Nahyun（神戸大学大学院人間発達環境学研究科片桐恵子研究室大学院生）、趙 心語（大阪大学大学院人間科学研究科大学院生）、鄭 徳鄰（東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻大学院生）、沼尾 優希（名古屋大学大学院情報学研究科大学院生）、八田 紘和（京都大学大学院文学研究科大学院生）、本多 俊行（東洋大学大学院社会科学研究科社会心理学専攻大学院生）、安原 彰子（同志社大学大学院心理学研究科大学院生）

退会

古賀 弥生、近藤 将人、杜 健、服部 美保子（物故）、水口 禮治

・自動退会 石田 希実、伊藤 言、内山 栞里、江口 正人、大下 京子、大森 翔子、櫃淵 めぐみ、貴島 侑哉、岸本 慎司、草野 広大、倉矢 匠、桑山 恵真、小関 優花、小林 梨紗、崔 凌、榎間 彩加、佐藤 俊雄、清水 計法、千田 茂博、高比良 桃子、田 楊、徳永 侑子、中尾 元、中川 朝美、成田 明日香、芳賀 麻誉美、橋本 栄里子、原田 和幸、ヒロザワ パウラユミ、藤 桂、藤崎 樹、細川 隆史、細野 昌和、本田 志穂、三橋 秋彦、山田 竜平、山本 謙治、吉川 ひかる、羅 竹、劉 婷、林 楚悠然、Mein-Woei Suen

所属変更

床尾 あかね (東京海上ディーアール株式会社主席研究員), 三島 浩路 (中部大学 現代教育学部教授), 田端 拓哉 (神戸女学院大学人間科学部), 服部 陽介 (大手前大学現代社会学部), 鈴木 文子 ((公社)国際経済労働研究所), 松崎 圭佑 (帝京大学文学部心理学科助手), 森下 雄輔 (帝塚山大学心理科学研究科研究員), 吉野 優香 (立正大学心理学部臨床心理学科特任講師), 尾崎 拓 (関西福祉科学大学心理科学部心理科学科講師), 木村 駿介 (立教大学大学コミュニティ福祉学部教育研究コーディネーター), 中村 早希 (帝塚山学院大学人間科学部心理学科専任講師), 新井 里奈子 (usedge 株式会社), 田中 皓介 (京都大学), 上島 淳史 (東北大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員 (PD)), 上岡 正明 (株式会社フロンティアコンサルティング), HU Anqi (茨城大学全学教育機構国際教育部門), 宮川 えりか (国際基督教大学), 下司 忠大 (早稲田大学文学学術院), 川本 哲也 (国土館大学文学部), 水野 景子 (関西学院大学・日本学術振興会), 田中 里奈 (名古屋大学大学院情報学研究科), 錢 琨 (福岡大学人文学部講師)

編集後記

第62回大会を無事盛会のうちに終えることができました。準備委員会の方々の長期間にわたる献身的なご尽力はもちろんのこと、今回も質疑応答掲示板で「大活躍」する参加者の方々が数多くいらっしゃったことが、それを支えていたと思います。TwitterやFacebookでは、大活躍勢から「燃え尽きた」というひとりごとが漏れ聞こえたりもしたのですが、それは、それだけ「燃える」要素がある学会発表がたくさんあったということです。今年も「社心の真骨頂は大会にあり」を見た思いがいたしました。来年こそは、京都・山科の地で皆さんと集えることを願いつつ。

(三浦 麻子・広報担当常任理事)